

# ART KISS LETTER

[アート・キッスレター]

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE  
Contemporary Art Museum, Kumamoto

熊本市現代美術館発行 <http://www.camk.or.jp>

vol.55

FREE

NEW YEAR  
[2012.新春号]



漫画家の西原理恵子さんと画家の山口晃さん@バラハク会場入口にて

「漫画家生活25周年記念企画  
西原理恵子博覧会 バラハク」はじまりました  
2011.12.10-2012.2.12

「漫画家生活25周年記念企画 西原理恵子博覧会 バラハク」が開幕いたしました！西原理恵子先生の画業を含め、これまでの多彩な活動を一挙にご紹介する内容です。本展は、九州初上陸をきっかけに展覧会内容を拡大・再構成しております。総出品点数は350点を超え、「毎日かあさん」の、2002年からの10年分の秘蔵映像（上映時間80分）、「人生画力対決」の秘蔵映像（藤子不二雄A先生、江口寿史先生）など、初公開の資料も多数あります。もちろん、当館で開催しました画力対決、画家の山口晃さんとの対戦作画（複製）なども展示しております。

熊本展オリジナルの「バラハクおみくじ」も体験できる、ポップな楽しい会場になっています。皆様のご来場お待ちしております！

12月11日に開催された、作家を迎えてのオープニングセレモニーには、くまモンがアピールに駆けつけてきてくれました。くまモンは、西原先生に作品内で「かわいい」と褒めていただいたこともあるのです。「クオリティが高すぎて、もはやゆるキャラではない」という鋭いご指摘もいただきました。(H.T)

## 巻頭言 「物語を紡ぐ美術館」

熊本市現代美術館館長 桜井武

美術館が企画する展覧会は、一過性のイベントではなく、終了後も様々なつながっていくものだ。例えば2011年夏に熊本市現代美術館で開催されたファッション展「ファッション、時代を着る」は、ファッションだけでなく、美術や演劇、映像に結びつく多くの物語を内包していた。2011年秋、私が訪れる機会を得たベネチアでは、おそらく開催中のビエンナーレ以上にインパクトのあった展覧会は、15世紀ゴシック建築のパラツォ・フォルチュニにおける現代展であった。マリアノ・フォルチュニは、「ファッション、時代を着る」展でその流麗な衣装が出品された20世紀初頭のデザイナーであり、彼はサンマルコ近くのパラツォ（館あるいは宮殿）を購入している。その企画展は、フォルチュニの美しい衣装やテキスタイル、そしてゴヤ、ロダン、ジャコメッティ等の収蔵作品を展示したまま、ジェームス・タレル、アボラモヴィッチ、白髪一雄を始めとした「具体」派等、尖鋭な現代美術を並列させる驚きに満ちたものであった。

スペイン出身でベネチアを終の棲家としたフォルチュニは、ファッションデザイナーであったばかりか、画家、写真家、舞台デザイナー、そして際立った美術品コレクターでもあった。おびただしい歴史的な作品が並ぶこのパラツォは、フォルチュニにとっての実験室、アトリエ、展覧会場、そして優雅なサロンであり、インスピレーションの源泉、創造の原点であった。多くの偉大なコレクションがコレクターの死後散逸する中で、このフォルチュニの歴史的な美術品の宝庫は、彼の死後、夫人によってベネチア市に寄贈され、過去と現在をつなぐ美術館として残った。

熊本のファッション展は、枝分かれしてベネチアでパラツォ・フォルチュニにもつながり、芸術の新たな可能性を想起させるのであった。

# 熊本市現代美術館の活動

## MUSEUM INFORMATION

### 開館9周年記念 澤田精一講演会

2011.10.10

開館9周年を記念して、絵本研究家澤田精一さんの講演会が開催されました。福音館書店で「こどものとも」「かがくのとも」などの編集に長年携わってこられた澤田さんの経験に基づく「絵本の編集」について、「どうしても絵本にするんだという強い信念が必要」「編集者の仕事は作家のよさを引き出すためのアイデア出し」といった興味深いお話や、「ジャリおじさん」(大竹伸朗作)制作秘話をお聞きすることができました。途中で何度も笑いが起る和やかな講演会となりました。(E.Z) 【参加人数：100人】



### 「小谷元彦展 幽体の知覚」関連イベント

#### 「小谷元彦展 幽体の知覚」CAMKレクチャーカレッジ

2011.10.23

展覧会企画・担当学芸員の芦田彩葵が、小谷さんの作品について「トランス(trans / trance)」をキーワードに講演を行いました。多様なメディアとカルチャーをトランス(横断)する小谷さん独特の作品展開、西洋からトランス(越境)した「彫刻概念」の日本での受容と変容に対する作家の批評的視点について触れながら、エネルギーや心身のバランスなど身体からトランス(転位)されたものを彫刻として表そうとする大胆な試み、そして展示空間までも演出することで、鑑賞者の身体性に強く訴え、恐怖や痛み、歎びが渦巻くトランス(恍惚)状態を創出する小谷さんの作品についてご紹介いたしました。(A.A)

【参加人数：40人】



#### 小谷元彦(本展作家)×黒沢清(映画監督) トーク・セッション

2011.11.3

展覧会開催を記念して、本展作家の小谷元彦さんと映画監督の黒沢清さんによるトーク・セッションを行いました。スケール感の出し方、対象との距離のとり方、音響の効果といった、お二人の制作や作品に対する姿勢、これまでの作風の展開など話題は尽きず、予定の時間を越えるロングトークとなりました。なかでも、実体のないものと現実の肉体をどの様に作品のなかで扱い、表すのか、両者を暗示する「影」の存在についてのお話は、今回の展覧会のテーマに深くつながる興味深いものでした。長時間立ち見でお聞きくださるお客様も大勢いらっしゃる大盛況のセッションとなりました。(A.A)

【参加人数：150人】



#### 小谷元彦展プレママ & ファミリーツアー

2011.10.1

「小谷元彦」展のファミリーツアーでは、ガラスケースなどが無い状態で設置されたインスタレーションの繊細な作品があるため、イベント展覧会補助スタッフのサポートを得て実施しました。おかげでよちよち歩きのお客さまも安心して楽しんでいただくことができました。中には「インフェルノ」の迫力あるサウンドがおばけ屋敷のようで、ちよっぴり怖くなった子も…。しかし、スタッフと一緒に手をつないで、不思議な空間を楽しんでもらう頃には、機嫌もなお「怖いけれどまた来たい」という感想を残してくれました。(A.S)

【参加人数：8人】

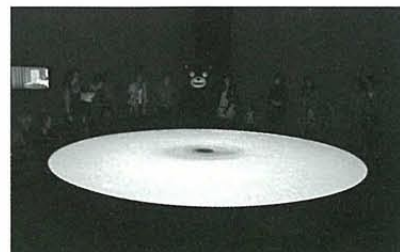
#### くまモンが来館しました!

2011.10.15

熊本県のキャラクター「くまモン」が「くまモンフォトアート展in熊本市現代美術館」のピーアールと、CAMK見学ツアーにやって来ました! 大人気のくまモン。あっという間に人だかりが! 熊本の名所に登場するくまモンの写真に来館者の方々も大喜び。その後、フリースペースをまわり、開催中の「小谷元彦展 幽体の知覚」のギャラリー・ツアーにもスペシャル参加。小谷さんの独創的世界観にくまモンも心を打たれている様子でした。(A.A)

\*当館では写真撮影をご遠慮いただいておりますが、当日、くまモンの作品前に限り、撮影の許可を出しました。

【参加人数：30人】



中央で作品に見入るくまモン

なんと早朝の4時からお待ちくださった方もいらっしゃったり、会場1時間前には座席整理券が満席になるという、皆さまの熱い歓迎を受けて、「西原理恵子の画力対決inバラハク」が開催されました(共催：小学館)。

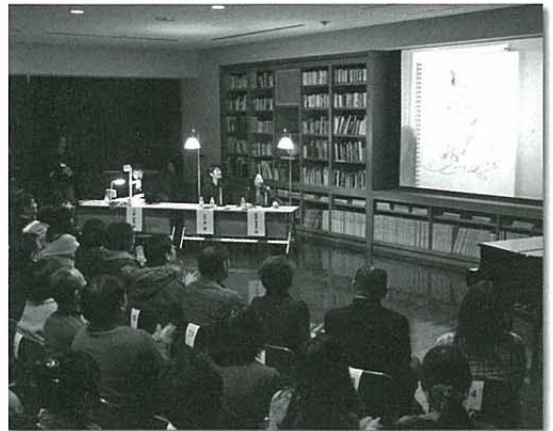
今回の対戦相手は、現代美術館での開催ということもあり、画家の山口晃さんでした。繊細かつ確かな構成力を持つ作品で大変人気の高い画家ですが、お人柄も大変柔和で、西原さんも会場内のお客様もすっかり虜に。なぜか時折、山口さんが西原さんの母としての慈愛に包まれるトークの場面もありました。画題にあわせて作画された作品群は、時間を延長して行ったこともあり、かなりの量がありました。その資料は、会場内で、3期に分けてすべてを紹介します。(H.T)

前期：12月15日～1月8日(例：立川談志、熊本ゆるキャラを創案など)

中期：1月9日～1月29日(例：宇宙戦艦ヤマト、サザエさんなど)

後期：1月30日～2月12日(例：風神雷神図、ラピュタなど)

【参加人数：250人】



## G3 vol.81「工房まる作品展 まる。てん」

福岡にある福祉作業所工房まるでは、「その人らしさ」が表れてくることを「自立」と考え、絵画や陶芸などの創作活動を行っています。障害のある人の表現を、収入を得ることができる「仕事」として創出するという活動は、アートの持つ可能性を感じさせてくれます。今回は太田宏介さん、大峯直幸さん、中牟田健児さん、松永大樹さん、柳田烈伸さん5名をご紹介します、力強く、個性豊かな作品を楽しんでいただきました。(E.Z)

### 工房まる展出品作家によるライブペインティング

2011.11.20

ホームギャラリーにて展覧会出品作家の太田宏介さん、大峯直幸さん、松永大樹さん3名による公開制作が行われました。太田さんと松永さんは、ベニヤ板にアクリル絵の具で、大峯さんは、画用紙にダーマツグラフと水彩絵の具を使っての公開制作でした。

途中休憩を挿みながら、約3時間かけて作品を仕上げてくださいましたが、汗をかきながら、とても集中して描かれている姿が印象的でした。女の子やお花をモチーフにしたかわいらしい作品や、熊本を題材にした作品など見ていてとても楽しくなる作品が出来上がりました。(N.H)

【参加人数：60人】



### GIII工房まるトーク「maruで描くこと+maruが描くもの」

2011.12.4

工房まるのスタッフと出品作家の柳田烈伸さん、中牟田健児さんに「工房まる」での活動についてトークをしていただきました。

工房まるのこれまでの取り組みや、障害がある、なしで区別しない、どんな人でも来なくなる場づくりをしていることなどを、スライドショー等を交えてお話しいただきました。

スタッフ、メンバーそれぞれの視点で「工房まる」の活動についてたっぷりお聞きすることができました。(N.H)

【参加人数：50人】



## 岩下徹ソロダンス公演会 & ワークショップ

### ソロダンス公演会

2011.11.12

山海塾の舞踊家として活躍中の岩下徹さんのソロダンス公演が開催されました。

熊本在住で音楽活動を行っている山岡恭介さんのパーカッションの音に合わせて即興で繰り広げられ、時折見られるユーモラスな仕草に会場からは静かな笑いが起こっていました。集中して観ている観客の姿が印象的な公演となりました。(E.Z)

【参加人数：70人】



### ワークショップ

2011.11.13

公演に引き続き、岩下徹さんのワークショップが開催されました。

最初は床の上にゆったりと寝そべて呼吸することから始まり、ゆっくりと横へ、そして上への動きを加えていって…と進んでいきます。同時に、岩下さんが姿勢のことや呼吸のこと、視線のことをさりげなくしかし丁寧にお話しされます。参加者の皆さんは体を動かしながら岩下さんのお話を自然に吸収しているようでした。休憩を少し挟んだあとは、元永定正の絵本『がちゃがちゃ どんどん』の線や形、擬音をインスピレーションとして体を動かしていきます。最後は「さわりなさい」という言葉をもとに体を動かしました。

身体をほぐして頭も柔らかくするWS。みなさんも笑顔で参加されていました。(M.F)

【参加人数：13人】



昨年に引き続き、アジア映画フェスティバルが2日間にわたり開催されました。初日の上映作品は、シェイクスピアの四大悲劇「ハムレット」をベースにした「女帝」(2006年 中国、香港映画 131分)。チャン・ツイイーの美しさを堪能していただきました。2日目は、「童年往事 時の流れ」(1985年 台湾映画 138分)。台湾映画の存在を世界に知らしめた侯孝賢監督の自伝的作品をお届けしました。(E.Z)

【参加人数：140人】



## 詩の朗読会

### 第94回

2011.9.22

第94回目のテーマは「風」。飛び入りの方も含めて、16名の方が、思い思いの「風」にまつわる詩を朗読されました。別れの風、記憶の風、季節の風、風景の風・・・秋の訪れが深まるにつれて、様々な風が私たちの周りに流れていることに気づかされました。(A.A)

### 第95回

2011.10.27

第95回のテーマは、「こころ・かたち」でした。このテーマは、現在開催中の小谷元彦展に着想を得たものです。今回は、飛び込み1名を含む、15名の詩作発表がありました。感謝の心をかたちに、または、長寿の日常を楽しみながら感謝の気持ちを祈りのかたちにするなどという日常に根ざしたものから、小谷展のように、心と体の関係、自分と社会的役割の関係、年を重ねることに深まる心の闇などについての内省的な表現まで、幅広く発表されました。どの詩作においても「心は動くもの」として示され、待ったり逆走したり、色がついたり、丸くなったり、表情のある面白みを感じました。(H.T)

### 第96回

2011.11.24

第96回のテーマは「名前」、飛び入りの2名を含め、17名の方が詩作を発表されました。「顔は知っているも名前が出てこない」というもどかしさや、母親の名前や、パートナーとの名前を呼び合わない親密な関係など、身近な体験をもとにした詩作や、社会で生きるときに名前の前につきまとう役割や役職についての考察、そして、3.11の震災ののち、新聞に掲載され続ける、逝去が確認された方々のお名前への想いなどが発表されました。テーマの「名前」から広がって、「名づける」という関係へと展開して作成された詩もあり、名付けて安心して、支配しているような、分かっているつもりになっている気持ちについて考察する作品も興味深いものがありました。(H.T)

## CAMK「読みがたり」

### 第24回

2011.8.20

今回は大人気のおばけもの、「おばけがきた！」のテーマで開催しました。絵本『おばけこわくないぞ』からはじまり、のっぺらぼうのおめんがちょっぴり怖い、おはなし『むじな』。他にもおばけのお母さんが五つ子の赤ちゃんと「うらめしや〜」の発声練習をする可愛い手袋人形『おばけの赤ちゃん』など、たくさんのおばけが登場しました。(C.T)

【参加人数：56人】



### 第25回

2011.9.24

今日のテーマは「どうぶつ」でした。絵本『りんごがひとつ』では、サルやウサギやゴリラなどたくさんの動物たちが、ひとつしかないりんごを前に頭を悩ませます。リズムある絵本の読み方に子どもたちもお話にひきこまれているようでした。また、絵本『オレ、だれ』は、月夜の中、そのシルエットだけで動物を当てるなぞなぞ形式の絵本。フラミンゴ！テナガザル！と声が上がリ、よく知っているなあと大人達はビックリしていました。お話の最後には恒例の紙芝居の登場。さっきまでお母さんのお膝の上に座っていた女の子が紙芝居の木枠を見た途端に一番前へお引越しの姿も見られ、大人気の紙芝居でした。(C.T)

【参加人数：39人】



STREET ART-PLEX KUMAMOTO 協働事業 EXTRAVAGANZA2011  
榎木靖子マリンバコンサート & Great Composer Memorial F.ショパン

2011.10.16

ストリート・アートプレックスの一年間の集大成であるエクストラヴァガンザ2011が今年も開催され、中心市街地7箇所ではミュージシャンやパフォーマーによる公演が行われました。美術館では、榎木靖子さんによるマリンバ演奏の後に、ショパン・メモリアルコンサートを開催しました。弾むようなマリンバと、ショパンの名曲の数々、秋の夜長にぴったりの心地よい音楽の時間になりました。(M.O)



【参加人数：100人】

ミュージック・ウェーブ No.52  
日本フィルハーモニー交響楽団 弦楽器四重奏コンサート

2011.11.27

日本フィルハーモニー交響楽団の田村昭博さん(ヴァイオリン)、大貫聖子さん(ヴァイオリン)、中川裕美子さん(ヴィオラ)、久保公人さん(チェロ)による弦楽器四重奏コンサートを開催しました。ショスタコービッチやドボルザークの曲など1時間たっぷり演奏していただきました。当館へのお越しが初めてのご出演者のみなさん。音楽と美術の関係など素敵なトークも交えた、冬の夕暮れを彩る華やかなコンサートになりました！(A.A)



【参加人数：90人】

第13回お話し玉手箱LIVE 開催

2011.10.30

第13回お話し玉手箱LIVEが開催されました。RKKアナウンサーの本田史郎さん、福島絵美さんが、熊本のむかし話「水車小屋のがわたろう」、新美南吉「ごん狐」、芥川龍之介「羅生門」を朗読しました。すこし不気味な、同時にちょっと滑稽な「水車小屋のがわたろう」では、BGMも交えた本田さんの巧みな語り口に聞き入ってしまいます。「ごん狐」では、福島さんの柔らかな声が、ごんの無邪気さ、幼さ、優しさにぴったりで、ごんの最後に会場は少ししんみり。芥川の怜悯な文章を緩急つけて語り聞かせた「羅生門」。名作が名作たるゆえんを改めて感じました。会場にいらした約60名の方々も熱心に聞き入っていらっしゃいました。(M.F)

【参加人数：60人】



明後日朝顔プロジェクト2011 収穫祭を行いました。

2011.10.27

木々が色づき始め秋も深まった頃、朝顔も収穫の時を迎えました。密度の高い「緑のカーテン」を実現するために取り入れた格子状の麻のネットには、いくつものツタが絡まり大きな種を実らせていました。ボランティアのみなさんと一緒に丁寧にツルをはずし種を集めます。昨年と比べると収穫量はやや少なめでしたが、収穫した種を大切に保管し来年につなげていきたいと思ひます。ツルは12月に開催するクリスマスリース作りに使い、新しいいのちを吹き込みたいと思ひます。(Y.M)

【参加人数：60人】



CAMKEES研修旅行2011

2011.10.29

当館ボランティアCAMKEES(キャンキース)のみなさんと研修旅行へ行ってきました。今年の研修旅行は、展覧会や古典芸能を鑑賞しながら親睦を深めることを目的として、福岡アジア美術館の「ハローキティアート展」と「博多・天神落語祭り2011」を観覧しました。

移動中のバス車内では、一人一人自己紹介をしていただき、趣味の話や身の上話など普段なかなかお話しできないことも聞くことができ、とても和やかな雰囲気でした。福岡到着後、博多駅の「タイル画アート」を見て回り、福岡アジア美術館では、サンリオ人気キャラクターの「ハローキティ」と、日頃は表に出ることの少ないキャラクターデザイナー自身にスポットをあてた展覧会をじっくり鑑賞し、その後、JR九州ホールに到着して、落語を観覧しました。CAMKEESのみなさんも落語観覧は初めてという方が多数でしたが、語りですべてを表現する落語に、終始笑いが絶えないだけでなく、日本のエンターテインメントを観た！という印象を受け、有意義な時間を過ごしました。CAMKEESのみなさんと賑やかで楽しい時間を過ごすことができ、親睦が深まった1日となりました。(N.H)

【参加人数：30人】



# ART de Gyan!

[アート・ド・ギャン]  
熊本弁で「アート、どう?」の意です

[展評]

## 第4回九州・高校生 SOJOビエンナーレ展2011

2011.11.16 ~ 12.11(前・後期) 崇城大学ギャラリー  
熊本市花畑町10-25 096-323-1158

崇城大学が主催する九州各県高校生を対象とする「第4回九州・高校生 SOJOビエンナーレ展2011」、本展は今回305点の応募のもと開催された。グランプリを受賞した西崎絵美さんの《16》、準グランプリの森川侑子さんの《RELATION》の、作品の構成や画力の安定感は今後の展開を強く期待させるものだった。また、創意が感じられたのが、第二高校(熊本)の川口明子さんの《錦》。錦鯉の表現に桜の花びらを貼りつけていた。ものの眺め方に個性と洗練を感じられたのが、第二高校(熊本)の山本理紗さんの《工場》。これからも様々な発表の機会に、臆することなく弛むことなく是非参加していただきたい。(H.T)



## 現代人気作家絵画展

2011.12.6 ~ 12.11 ギャラリーカフェアーク  
熊本市上通町5-46イーストンビル3F 096-352-3308

日本画を中心とした日本の現代作家7名と海外の人気作家の最新作をまじえた展覧会。鶴田一郎や中島千波などの人気作家から、松永龍太郎、小原祐介といった若手作家の作品を展示。鶴田一郎氏の最新作となる版画「MIROKU 黎明」は色彩が豊かで、ひときわ存在感があつた。松永龍太郎氏は花と宇宙が描かれた作品が多く、儂い花の命と無限に広がる宇宙の二つの時間を共有させているという。新しい日本画の魅力をみつけることができる展覧会であった。(N.H)



## 『陶』ふたり展 - 赤と白×黒 - 尾崎玲子・田口和代

2011.11.15 ~ 11.20 熊本県伝統工芸館  
熊本市千葉城町3-35 096-324-4930

熊本在住の尾崎玲子さんと田口和代さんおふたりの陶芸の展示会。尾崎さんは赤をテーマに、田口さんは白と黒をテーマとし今回の展示に臨まれている。会場内には、普段使いのカップや器はもちろん、高さや重量感のあるオブジェや花器が飾られていた。尾崎さんの二メートルほどある玉ねぎをモチーフとしたもの、両手で抱えるほどの大きなリンゴのオブジェは目を惹いた。また、釉薬を自身で調合し制作される田口さんは、「この色と思う黒がなかなか出ないけれど、それが楽しいんです」とのこと。赤と白と黒の調和の中で、女性の力強さや自由に制作されている姿勢がイキイキと感じられる展示会であった。(C.T)



## 下岡由枝・盛國泉 秋の夜長展

2011.10.22 ~ 10.30 はじめギャラリー  
熊本県熊本市錦ヶ丘17番5号 096-365-0331

陶芸家、下岡由枝さんと、ガラス工芸作家の盛國泉さんによる二人展。秋の夜長と題された本展は、秋の夜長を楽しむ、器や花器、「灯り」をテーマにしたオブジェなどが並ぶ。下岡さんの、住居や通路を思わせるオブジェは10cmほどで小ぶりでありながら、巧みな作りと土の素材感、自然光の陰影が相まって、誘われるような美しさがあった。また、盛國さんのガラス作品は、一度きりの型どりの技法で作られるため全て一点ものである。氷のようなマテリアルは、表面の加工によっていろいろな角度からその表情を楽しめるのも魅力で、寒さが増すこれからの季節には、雪解けのような温かさを感じた。秋の夜長にいつまでもじっくりと浸ってみたい展示であった。(M.O)



## 第41回 同光会 書展

2011.8.16 ~ 8.21 熊本県立美術館・分館 ギャラリー  
熊本市二の丸2番 096-352-2111

福岡教育大学書道科OB熊本県人会の、年に一回の書道展である。今年は、全員で「漢字仮名まじりの書」に取り組んで、その成果を発表することになった。「全員で話合ってテーマを決めたいし、途中下見もあったし、張り切ってみたけど、評価は如何でしょう」とは、若い受付担当者・大学院生の弁。「漢字仮名まじりの書」は、現在の高等学校書道の授業でも中心課題であり、今日的な表現様式であるからもっとも重要課題であるが、歴史が浅いため、研究資料が少なく、指導者が頭を痛めている領域である。これまで、これは巧いという作品にはあまり出会ってないのが実情である。その難しい今日的なテーマに全員で取り組み、みなさん各々良く頑張っておられたと評価したい。難しいテーマに取り組まれた姿勢に敬意を表し、今後期待したいと思った。(T.M)

## 第39回 県書道連盟展

2011.9.27 ~ 10.3 熊本県立美術館 分館  
熊本市二の丸2番 096-352-2111

県下で最大の書道団体であり県書道連盟(平方研水理事長)は派閥を越えて集った団体である。会員246人が、漢字、かな、近代詩文書、大字書、篆刻とそれぞれに個性を競った作品展となっていて多彩な会場となっていた。選抜会員の中から書道連盟賞に3名が選ばれた。古閑静倉(こが・せいあん)さんは「黍稷は馨しきに非ず」をスピード感のある筆さばきで力強い作品となっていた。山下静雨(しんあ)さんは、斎藤茂吉の歌を流麗な線でちらしの型もうまくまとめていた。川井暹水(しんすい)さんは、月詩句四題を、刀の切れ味がうまく、白文、朱文とも線の変化もつけてうまくまとめていた。(S.K)



## 第53回 書道愛好者展

2011.10.25 ~ 10.30 熊本県立美術館 分館  
熊本市二の丸2番 096-352-2111

「心をつなぐ書の祭り、さわやかに今年も」というテーマで県書道愛好者(佐川虎山会長)の会員70人が82点を展示した。漢字、かな、大字書、近代詩文書に篆刻もあり多彩な会場となっていた。同展の創立者である故、清水天山さんの「花」は白鳥の羽毛でつくられた筆で、青墨で書かれており、今でも輝いて見える。佐川会長の「仁」はスケールの大きい力強い堂々たる作品である。水野涼山、上原城花、中島江月さんの濃墨大作はリズムカルな線で力強く豪快な作である。安倍春山さんは病気で麻痺した右手で「還」をうまくまとめた。水足桜堤さんの篆刻は刀の切れ味が良い。文化功労者の故、手島右卿さんの「現」も特別出品されていた。(S.K)



# ホームギャラリーからのお便りvol.9

LETTER FROM HOME GALLERY

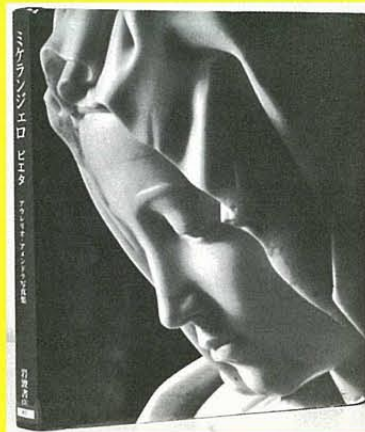
ホームギャラリーからおすすめの1冊をご紹介します。

## 「アウレリオ・アメンドラ写真集 ミケランジェロ ピエタ」

森雅彦訳 岩波書店 1999年

今回ご紹介するのは、独自の優れた作品解釈で注目されているイタリアの彫刻写真家、アウレリオ・アメンドラによるミケランジェロ、ピエタの写真集である。

ヴァチカンのサン・ピエトロ大聖堂の《ピエタ》は、ミケランジェロの代表作の一つで1499年に制作された。この本を通して見るピエタは、マリアの心の声を誰よりも近くで聞くような親密さがある。非常に細部まで写され、どの頁を見ても驚きと発見があり、言葉はそこになくても解釈がじっくりと深まっていくような濃厚な時間と感動がある。当館の中央には、マリーナ・アブラモヴィッチの《ピエタ》が掲げられている。併せてじっくりと見ていただきたい一冊である。(M.O)



## VISITOR'S LETTER

[来館者のみなさんからのメッセージ]  
アンケートに寄せられた感想(抜粋)を紹介します。

### 小谷元彦展 幽体の知覚

- 何人かで表現しているのかと思う程、ジャンルが幅広く、見ていて飽きなかったし印象に残った。かなり見応えのあるアートを間近にゆっくりと見る事ができて満足した。(30代、女性、熊本市内)
- 宇宙空間にいるような映画の1シーンの様な具体的に身体で感じる事ができた。(50代、女性、熊本市内)
- 彫刻に対する概念が一変した。幽体(ファントム)という存在は目に見えないが、確かにそこに存在する。それを視覚化した着想と、作品は確かに素晴らしい。幽体こそがリアルであるということもできると思った。フォローシリーズが美しかったし、能面も人間の情念がよく出ていると思った。インフェルノは斬新な試みだと思った。(50代、女性、熊本市内)
- 斬新で意表をつく作品で印象深かった。彫刻に対する見方が変わった。(男性、熊本市内)
- 小谷氏の生、死、人間、生き物全てに対しての感じ方、思いなど、自分との相違点を感じる事が出来ました。日本古来の仏像などの美術に西洋美術が入ってきたことによる日本美術の根底のゆがみを表現した作品がとても印象的でした。(10代、女性、熊本県内)
- 魂に突き刺さる!! 強烈なインパクトでした。(40代、男性、熊本市内)
- "Inferno"は絵画作品の世界に入り込んだ様でした。(30代、男性、熊本県内)

## 編集後記

本号では、冨澤の代わりに編集に加わりましたが、2011年秋冬のCAMKの活動を振り返る良い機会となりました。昨年は、日常という概念が大きく揺らぐ年となりました。自然がもつ圧倒的な力と存在、そして、私たち一人一人がよく考え、自立した強い意識をもって行動する必要性を痛感しました。厳しい状況下の時にこそ、お互い支え合い、人々の創造活動を絶やすことなく、前を向いて歩んでいきたいと思ひます。今年はいよいよ開館10周年を迎えます。2012年も、CAMKをどうぞ宜しくお願ひいたします!

芦田彩葵

2011年は、小谷元彦さんや西原理恵子さん、くまモン(!)をはじめとする華やかなゲストと、駆け付けてくださった多くのお客様で大変賑やかに締めくくられました。今年は当館10周年ということで、スタッフ、ボランティアさん、多彩なゲストと一緒にCAMKを盛り上げていきたいと思っています。今年もCAMKをよろしくお願ひいたします。

大岩みゆき

●発行元/ ART KISS LETTER アート・キッス・レター Vol.55 2012年1月発行(新春号) ◎無料◎

●発行人/ 桜井 武 編集/ 芦田彩葵、大岩みゆき

●デザイン/ (有)松永 壮デザイン事務所 ●印刷/ シモダ印刷

●発行/ 熊本市現代美術館 〒860-0845熊本市上通町2-3 TEL.096-278-7500 FAX.096-359-7892

### ●執筆者一覧

\*ギャラリー取材原稿の文末にイニシャルにて記載しております。

兼城昌山

Syozan Kaneshiro (書道家)

森山淡草

Tanso Moriyama (書道家)

本田代志子

Yoshiko Honda (熊本市現代美術館主任学芸員)

藏座江美

Emi Zoza (熊本市現代美術館主任学芸員)

冨澤治子

Haruko Tomisawa (熊本市現代美術館主任学芸員)

坂本顕子

Akiko Sakamoto (熊本市現代美術館主任学芸員)

芦田彩葵

Aki Ashida (熊本市現代美術館主任学芸員)

大岩みゆき

Miyuki Oiwa (熊本市現代美術館学芸アシスタント)

藤本真帆

Maho Fujimoto (熊本市現代美術館学芸アシスタント)

高橋知江

Chie Takahashi (熊本市現代美術館学芸アシスタント)

濱川倫子

Noriko Hamakawa (熊本市現代美術館学芸アシスタント)

村上由起

Yuki Murakami (熊本市現代美術館総務スタッフ)

# SUITTO KUMAMOTO

CAMKフレンドインタビュー

\*今年度は熊本の次世代文化を支える人々をご紹介します。

[スイット・クマモト]

## 河原町アートアワード2011 対談「未来を創る物語 加藤種男×幸山政史」を見て

2011年は、記録的な暑さや東日本での震災などとともに、熊本という一地方都市のアートの状況において、小さいけれども確実な変化が生まれたことが、記憶されるのではないかと、そんな気がしてならない。やはり、今年一番の変化は、長年熊本で活動してきた「河原町アートの日」が、大きな1歩をふみ出したことにある。今年は、通常月1回開催されている「アートの日」や、企業やアート団体、美術館などが賞を出す「河原町アートアワード」に加えて、7月～9月の3か月にわたり、多くのイベントやワークショップを行った。7月は、地元の小学生が熊本大学の学生と一緒に地域の題材を劇に仕立てた「城下町物語」の公演のほか、街なかでジャズや大道芸といったパフォーマンス・アーツのイベントを手がけるストリートアートブックスとのコラボ、8月の隣接する新町古町地域の街づくりメンバーとの対談、大巻伸嗣のレクチャーやモニュメント作りのワークショップ、熊本市現代美術館との共催によるトーチカのPIKAPIKA撮影などである。河原町がこれほどまでに張り切った理由は、アサヒアートフェスティバル(AAF)へ初参加したことにある。実施7年目にして初AAFという遅いスタートで、何を今さらと思われる向きもあるかもしれない。だが、河原町がこんなにも多くの団体と関わってこう考えたのは、より多くの人々にその活動を知ってもらいたい、また、自分たちの活動の意味を問い直したいという思いからである。地域の中でアートを展開していくことには多くの困難が伴う。古い織機問屋街の空きスペースにギャラリーや事務所、カフェ、ショップなどが並ぶ河原町は、地縁や血縁といったものとは

別の、若い人やアーティストによる新しいコミュニティや人の流れを作り出している。しかし、グッズやデザイン関連の作品のレベルは高い反面、アート作品が弱いことや、全国的な認知度はあがってきたが、地元や近隣のコミュニティの人々から知られていないなどの問題、もちろん、基本的に自発的な活動とはいえ、中心となるスタッフの疲労や、将来的にどう運営していくのか、といった問題は山積しており、それらを突破していくための糸口として、AAFへチャレンジしたということが本音である。

結果的には、外部へ出て行き様々な団体と交流することで、自分たちを外から見る目が養われ、そのレベルや実力を知ることができたことや、コミュニティと関わるアートプロジェクトとして、摩擦をおそれず、新たなチャレンジをしていく力を得たことが大きかったのではないと思う。

それらの中で、最も大きな事業が、幸山政史熊本市長と加藤種男AAF事務局長の対談イベントであったと言えるだろう。残暑厳しい中、明治期から続く木造の早川倉庫で行われた対談は、河原町が関わりを持つ熊本の様々な文化団体や、地域の人々が多数来場し、たいへん熱気あふれる内容となった。その中で印象的だったのが、加藤氏の「河原町や美術館が街のハブになっていく」という言葉である。熊本の文化団体は、「肥後もっこす」の言葉で知られるように、それぞれ自己主張や個性が強く、なかなかまとまりにくいのが通例であったし、いわゆる文化人、文化リーダーとよばれる方々の高齢化もあり、世代交代を進めていかなければならない、という実情もある。その

なかで、九州新幹線が開業し、熊本市も政令指定都市を目指す状況になったときに、ようやく皆が互いの顔を見合わせて、力を出し合う場面が生まれてきたのではないかと。

個人的に興味深かったのは、この日集まった観衆から「行政にこうして欲しい」という要望が出なかったことだ。もちろん「アーティストが食えない」とか「発表の場が少ない」というような半ば宿命的な問題は出されたが、総じて「こういう熊本にしたい」という前向きな意見が多かった。自分たちが街の文化の当事者であり、無いことを誰かのせいにするのではなく、無いなら自分たちで作ろう、やっていこうという意識がそこにはあった。市長が対談に登壇したのも、そういう盛り上がりを感じとられたからであろう。これらの「市民力」や「文化力」をうまく生かすかたちで、ハブとなるグループがうまく街の力を繋げていき、行政が大きなヴィジョンを持って、それらをサポートしていくことができれば、熊本が創造都市を目指すことも夢ではない、とそんな思いが胸にわきおこってくるような対談であった。(A.S)



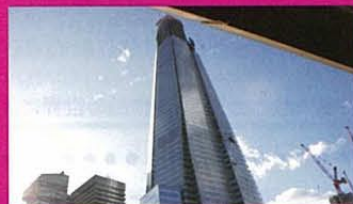
# WORLD NEWS

## 「ロンドンの今 — 高揚するサザック地域」

このところ政治的にも経済的にも芳しくないニュースが流れていたロンドンであるが、2011年秋訪れてみると、都市全体に活気があり、とりわけ文化的には見るべきものが多くて驚いた。主要美術館は、テイトモダンのゲルハルト・リヒター展を始め、ヴィクトリア&アルバートのポストモダニズム展、ロイヤル・アカデミーのドガ展等、力がこもった企画展で賑わっていた。

今ロンドンで特筆すべきは、かつては凋落の一途をたどり危険地域でもあったサザックである。テムズ河の向かい側にはロンドンの象徴セントポール寺院が聳え、世界の金融の中枢であるシティが優雅に広がる。その対岸にある荒廃したサザックを一举に再生させたのは、2000年にセンセーショナルに開館した

現代美術館テイトモダンであった。入場者数では先発のニューヨーク近代美術館やポンピドーを超えて今や世界一を誇る。その成功に甘んじることなく2006年には「テイトモダンは変化すると」宣言。2012年の夏、この広大な建物の裏側に、同じく大規模なテイトモダン2号が出現する。設計はテイトモダンと同じヘルツォーク&ド・ムーロンで、環境に配慮したサステナブルな建築デザインが目玉される。ところでテイトモダンからサザック地域の先に目をやると、ひとときわ高い超高層ビルが建築中である。「シャード・ロンドンブリッジ」で、建築はレンゾ・ピアノ。空も街も反映するガラス張りのこのビルは、2012年夏に完成すると、ヨーロッパで一番高い建物となる。



シャード・ロンドンブリッジ 建築レンゾ・ピアノ



テイトモダン



ホワイトキューブ・サウス



テイトモダンよりリニアムブリッジとセントポール寺院を眺める

この「ザ・シャード」の近くに2011年秋、最新の画廊「ホワイトキューブ・サウス」が開店した。商業画廊「ホワイトキューブ」には新しい美術運動を起こす力があり、最も尖鋭な現代美術ギャラリーとして国際的にも知られる。「ホワイトキューブ」にとって、これはロンドンで3軒目の店となる。その内部スペースは5千㎡を超え、美術館並みの巨大さである。この大空間では、若手数人の個展と、デミアン・ハーストや杉本博司等のグループ展が開催されており、インバウトのある新たな画廊の出現となった。勿論、ロンドンオリンピックの影響大であるが、ロンドンの一地域、それもかつては見放され落ち込んでいた地域が、美術館を軸として文化的、経済的に変容する高揚感には目を見張るものがあった。(T.S)